



理科年表 2026

国立天文台 編

丸善出版 ポケット版：A6判，机上版：A5判 1,224頁

ポケット版：1,500円＋税，机上版：3,200円＋税

研究資料

お薦め度

5

☆☆☆☆☆

「理科年表が100周年らしいので、書評とか掲載しませんか？」という話が天文月報の編集会議で持ち上がりました。とはいえ、教科書や専門書、読み物といった本とは全く違うため、引き受けたものの何を書こうかとしばらく悩むことになりました。ちょうどその頃、国立天文台ニュースでも「理科年表創刊100周年」の特集が組まれ^{*1}、参考にさせていただこうと手に取ってみました。この特集では、理科年表の変遷、暦部や天文部だけでなく、理科年表に掲載されている他の分野についても簡潔に紹介されており、非常に読みやすくとまっているという印象でした。とても参考になった反面、書評で書くことがなくなってしまったとさらに悩むことになってしまいました。ただ、この特集にあった「理科年表とわたし」というコーナーで、筆者たちと理科年表の個人的な思い出が掲載されていたので、ここでも私と理科年表についての思い出を書くことで、理科年表の書評としたいと思います。

前振りが長くなりましたが、私が理科年表を初めて手に取ったのは、おそらく大学の実験の授業のときだったと思います。高校生の時は天文部に所属していたので、理科年表より天文年鑑を愛読していたのですが、大学では物理・化学・生物・地学とすべての実験があったため、理科年表が必須アイテムでした。初めて理科年表を手に取った時の印象は、「どう見ても鈍器」「なんで“国立天文台編”なんだろう」の2つでした。大学の先生か

らは、「理系なら税金だと思って毎年買っておくように」というようなことを言われた覚えがあります（極貧学生には難しかったので図書館や研究室にお世話になっていました。多謝）。

私が最初に理科年表を手に取った時はまだ系外惑星の項目は単独ではありませんでしたが^{*2}、現在では見開き1ページに発見方法や代表的な系外惑星の表が掲載され、系外惑星の発見数は毎年更新されています。同様に、他の分野でも新しい発見があればその内容が検討の上反映され、100年前はハードカバーで1.5 cm程の厚みの本が、今年は3.8 cmもの厚さになっており、100年間の科学の進歩の重さを感じることもできます。

ChatGPTやGeminiなどの生成AIがなんでも（ひとまず）答えてくれる現在でも、大事なパラメータについては原典を確認する必要があるため、確実なデータブックが近くにあると安心します。（税金ではなく）安心を買うと思えば毎年買っておきたいと思う一方、本の重さに耐える棚とスペースが悩みどころです。分厚い理科年表を手に取るにはまだハードルがあるという方はぜひ一度「国立天文台ニュース2025年秋号」の特集^{*1}をご覧ください。その上で、実際の理科年表も手に取っていただければ幸いです。また、ご自身の理科年表との思い出（もしあれば）を、科学の進歩と併せて振り返ってみるというのも面白いかもしれませんね。

日下部展彦（自然科学研究機構）

^{*1} <https://www.nao.ac.jp/news/topics/2025/20251211-naoj-news.html>

^{*2} 理科年表に「太陽系外惑星」の項目が独立に新設されたのは2003年版から（Gemini調べ）